

## 第5章 平成元年度山口大学構内の立会調査

### 第1節 吉田構内の立会調査

#### 1 榎野寮ボイラー設備改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 O・P-20・21

調査期間 平成元年4月3日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約25m<sup>2</sup>

調査結果 工事は、榎野寮ボイラー設備の改修に伴い、2基のため柵の新設とそれから分岐する既設柵への配管の接続を行うものである。配管部分は現地表面から約50cm程度の掘削であったため、調査はまず、現地表面から最大約1mの掘削を行う西側のため柵部分の土層観察から実施した。現地表面から約80cm掘り下げたところで、東に向けて走行する高圧ケーブルの存在を記したシートが見つかった。本線は少なくともその下位約30cmに埋設されていることが確実なため、工事深度内はすでに攪乱を受けていると考えられた。東側のため柵部分は、この高圧ケーブルの延長線上にあること、また、既設柵が近接して存在することなどから調査対象から除外した。

配管部分は、既設の構築物による攪乱を免れている可能性の最も高い西側のため柵から南に分岐する部分について調査した。幅約40cm、総延長距離約25mについて立ち会ったが、現地表面から約40cmまでは砂質の埋め土で、その下位には、地山と考えられる黄褐色粘質土を主体とした後世の攪乱による土層がブロック状に堆積している。土層の堆積状況から本学統合移転時の造成による攪乱に起因すると思われるが、調査面積が狭く積極的な資料は得られなかった。

なお、遺物は全く出土しなかった。

(木村)

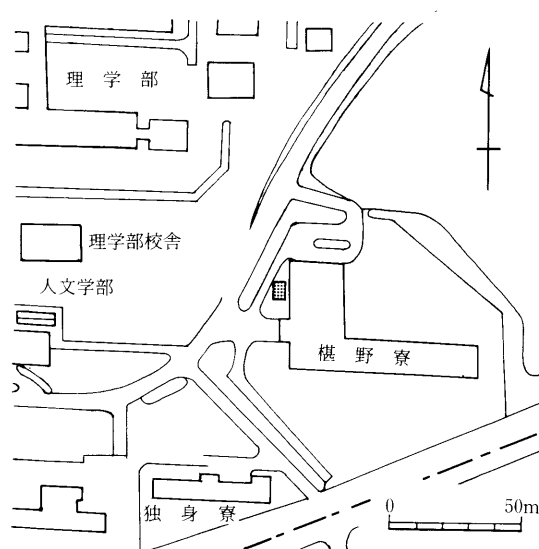


Fig. 27 調査区位置図

## 2 野球場防球ネット新営に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 I・J・K-21、H・I・K-22

調査期間 平成元年4月3・4日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約7m<sup>2</sup>

調査結果 工事は、吉田構内の南端中央部に位置する、野球場の東西両縁に沿って防球ネットを新営するものである。調査は、支柱となるコンクリートポールの埋設地点20ヶ所について10m間隔で行ったが、工事の性格上、各土層の堆積状況は十分に把握できなかった。

遺物包含層と思われる灰オリーブ色土 (Hue5Y4/2) は、北半部を中心に3ヶ所で検出した。出土遺物には土師器、須恵器、歴史時代土師器、瓦質土器、陶器など11点があるが、いずれも小破片で、時期差のある遺物が混入していることから、周辺からの流れ込みによるものと考えられる。

また、北端部では、土師器を包含する黒褐色粘質土 (Hue5YR2/1) が堆積している。色調、遺物の時期などから、北側に隣接する「遺跡保存地区」の遺構<sup>1) 2) 3)</sup>と一連のものである可能性があるが、遺構の性格はわからない。

なお、野球場南縁を巡る市道部分では、弥生時代の遺物包含層が検出されており、「遺跡保存地区」から野球場にかけて、弥生時代から古墳時代の遺構、遺物包含層が広範囲に分布していることが予想される。(河村)

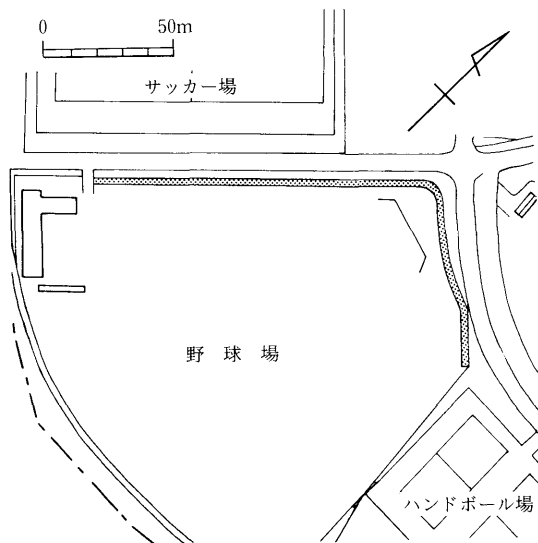


Fig. 28 調査区位置図

【注】

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和60・61年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1990年)。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「市道神郷1号線および問田神郷線の送水管理設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。

### 3 防火水槽配管布設に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K-21・22

調査期間 平成元年4月4・5日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約15m<sup>2</sup>

調査結果 工事は、国際交流会館と人文学部間に存在する防火水槽への配管を埋設するために、野球場東縁部分とハンドボールコート西縁部分の総延長距離約20mについて、幅約75cm、現地表面から約1mの掘削を行うものである。

野球場東縁部分の基本層序は、上位から、腐植土、本学統合移転時の造成による埋め土、旧耕作土、床土、灰オリーブ色土 (Hue5Y4/2)、黄褐色粘質土の地山となっている。灰オリーブ色土は現地表面から約75cmで検出され、層厚は20～25cmである。木炭を含んでおり、先に述べた野球場防球ネット新営に伴う立会調査で検出された遺物包含層の可能性はあるが、今回の調査では遺物は出土しなかった。

遺構は西端部で、上面径約20cm、深さ18cmの柱穴1個を検出した。出土遺物はないが、埋積土が黒褐色粘質土 (Hue5YR2/1) であることから、北側に隣接する「遺跡保存地区」で検出される弥生時代から古墳時代の遺構と一連のものである可能性がある。

ハンドボールコート部分は野球場東縁部分に比べて約80cm高くなっており、工事基底面まで掘削したが、腐植土、本学統合移転時の造成による埋め土、旧耕作土の堆積がみられたにすぎない。

(河村)

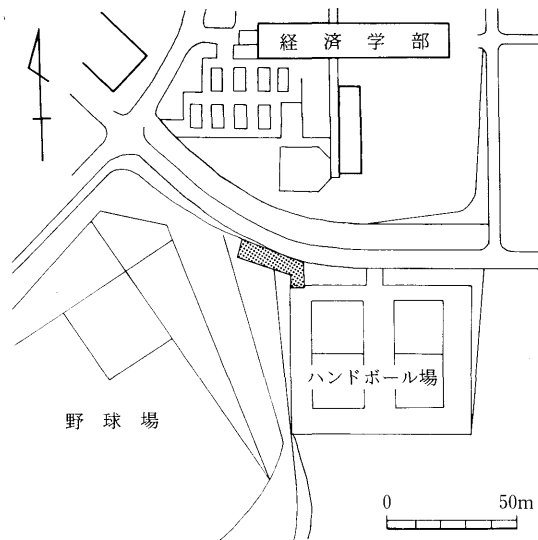


Fig. 29 調査区位置図

#### 4 吉田寮ボイラー設備改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-8

調査期間 平成元年 4月6日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 4 m<sup>2</sup>

調査結果 工事は、ボイラー棟西側に隣接してブロー機を新設するもので、東西約1.6 m、南北約2.1mの範囲内を現地表から約100 cm掘削するものである。ボイラー棟周辺は東から西へ大きく三段にわたって造成されており、調査地域は中位の段上に位置し、大規模な削平が予想された。

土層の堆積状況は、現地表面から約20 cmまでは腐植土で、その下位には工事基底面まで本学統合移転時の埋め土の堆積がみられた。埋め土中にも遺物包含層と考えられる堆積層は検出されず、工事による埋蔵文化財への直接の影響はなかった。

なお、今回の調査地点の東に存在する上位の段上では、昭和58年度に学生部アーチェリー場的台設置に伴い立会調査を実施しており、現地表下約30 cmで岩盤が検出されている。したがって、上位の段上では、北から南に延びる丘陵の鞍部が造成によって大きく削平を受けているが、土層の堆積状況から、ボイラー棟の存在する段は丘陵のカットによる平坦面ではなく、東方の丘陵の削平土によって谷を埋めた造成面である可能性が高い。

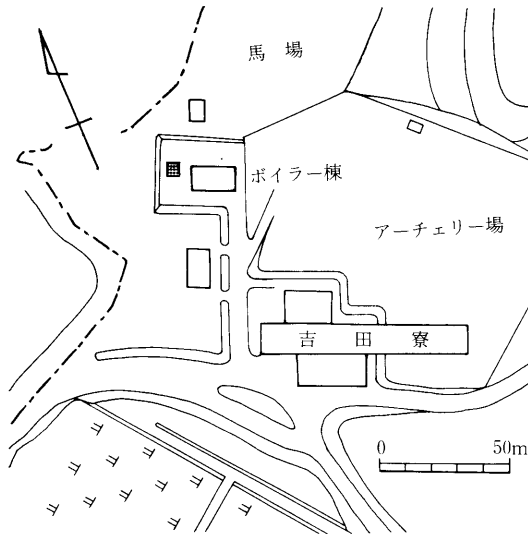


Fig. 30 調査区位置図

なお、今後、今回の掘削規模をこえる工事については、遺物包含層の存在が予想されるため、調査を実施する必要がある。(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「学生部アーチェリー場的台・電柱設置に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年)。

5 体育施設系給水管改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 G・H-16

調査期間 平成元年6月19日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約50㎡

調査結果 工事は、体育館の南側部分に東西方向に、総延長距離約60mについて幅約60cm、現地表面から約75cmの掘削を行い、給水管を埋設するものである。土層の堆積状態は、工事地点による層厚の差異はあるが、上位から本学統合移転時の造成による埋め土、旧耕作土、床土、弥生時代から古墳時代の遺構の検出面である黄褐色の粘質土が検出される。遺物包含層は未検出であったが、工事管路の東端部から西へ約14mの地点で、北東-南西に走行する溝を検出した。検出面は現地表面から約35cm下位で、幅約4.8m、深さ約35cmの規模をもつ。南に隣接する音楽棟敷地で検出した溝と関連するものかもしれない。部分的に掘り下げたが、出土遺物はなかった。溝の取り扱いについて関係部局と協議の結果、遺構面におよばない範囲で工事を行うことで合意が得られ、遺構は保存されることになった。

なお、埋め土中から陶器の壺が出土した。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 26(2))

萩焼の壺で、口径に比べて器高が低く、皿状を呈する。体部は内湾しながら開き、口縁部は直立して短く立ち上がる。素地は淡黄色 (Hue5Y8/3) で、内面、外面上半部に淡黄色 (Hue2.5Y8/3) の釉が施釉される。復原口径9.0cm、復原底径3.8cm、器高2.7cm。 (河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報1』、1982年)。



Fig. 31 調査区位置図

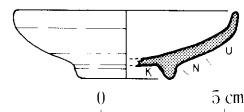


Fig. 32 出土遺物実測図

## 6 大学会館前記念植樹に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 M-13

調査期間 平成元年6月8日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6m<sup>2</sup>

調査結果 植樹は、大学会館の南東約10mの地域内に7ヶ所が計画された。うち2ヶ所は大学会館新営に伴い、発掘調査を実施した範囲内に位置するため、調査対象から除外した。掘削規模は、東西に5m間隔で、径1mの植樹壙について、現地表面から最大で約70cm行うものである。

大学会館敷地では、昭和58年度の調査で縄文時代から江戸時代にかけての多量の遺物が包含層から出土しており<sup>1)</sup>、本事業によって遺物包含層が掘削されるおそれがあったため、立会調査を実施した。その結果、各地点とも掘削範囲内はすべて真砂土が搬入されており、埋蔵文化財への影響はないと判断された。

なお、今回の調査地域の東方約35mの地点で実施した、大学会館へのケーブル埋設に伴う発掘調査では、遺構面が現地表面下約10cmで検出されている<sup>2)</sup>。両地点とも現地表面の標高はほとんど差異がなく、本学統合移転時の大きな削平が行われていないことから、今回の調査地域付近では地山が大きく西へ下降していることが予想される。(木村)

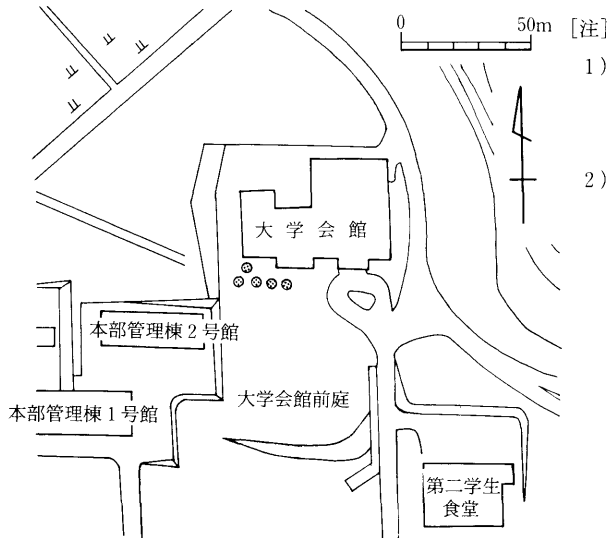


Fig. 33 調査区位置図

- [注]
- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年)。
  - 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』、1985年)。

## 7 吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・M-8

調査期間 平成元年10月2・3日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約45㎡

調査結果 工事地域周辺では過去に数件の立会調査を実施しているが、いずれも工事面積、掘削深度が小規模であったため、埋蔵文化財に対する十分なデータが得られていないのが現状であった。今回の工事は、ボイラー棟に隣接して南北約5.4m、東西約8.6mの範囲内を現地表面から約2.7m掘削するもので、吉田構内北端部の埋蔵文化財の有無を把握する良好な機会となった。

土層の堆積層順は、現地表面から約1.7mまで本学移転造成時の埋め土が厚く堆積しており、その下位には層厚約20～35cmの旧水田耕作土が認められる。旧耕土の直下には、黒色粘質土(Hue10YR1.7/1)の遺物包含層が堆積しているが、後世の削平によって層厚は最大でも8cmで、分布範囲も調査地域の南東隅に残存するに過ぎない。遺物包含層からは、土師器5点、須恵器、歴史時代の土師質土器各1点のほか、二次加工のある剝片・剝片各1点が出土した。同層は、大きく時期の隔たる遺物を包含していることから、二次堆積層と考えられる。遺物包含層の下位は、灰オリーブ色小礫混じり粘質土(Hue7.5Y5/2)の地山であるが、遺構は検出できなかった。

ボイラー棟の位置する地域は、先に吉田寮ボイラー設備改修に伴う立会調査の項で述べたように、東方の丘陵の削平土によって谷を埋積した造成面である可能性が高い。ボイラー棟の北側には、北から南に開く谷の周囲をとりまいて丘陵が存在する。今回出土した各時期の遺物は、丘陵縁辺部に立地する居住地から流入したものと考えられる。遺物には、縄文時代にさかのぼる可能性のある遺物も含まれており、今後の調査による縄文時代から古墳時代の遺構の検出が期待される。

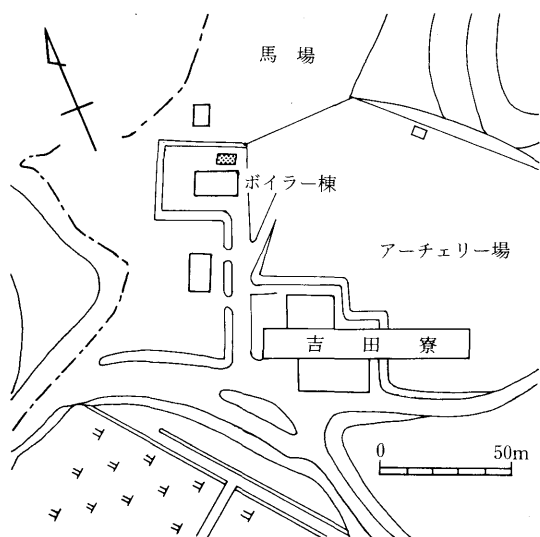


Fig. 34 調査区位置図

平成元年度山口大学構内の立会調査

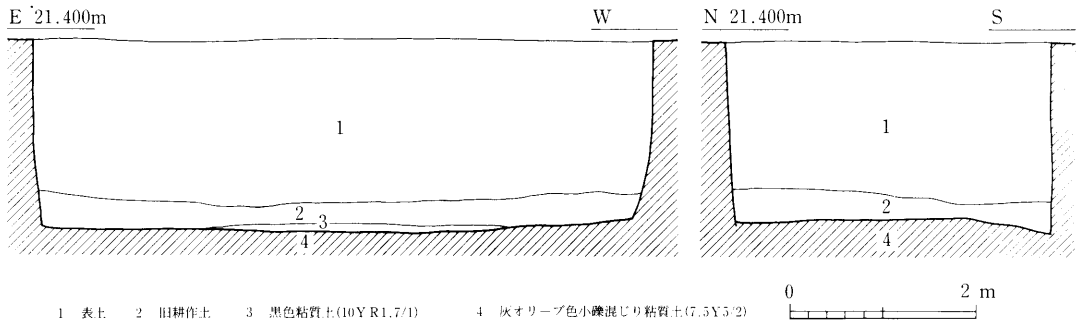


Fig. 35 土層断面実測図

出土遺物 (Fig. 36, PL. 26(3))

1 は二次加工のある剥片で、上下両端を欠損する。縦長剥片を素材とし、二次加工は背面右側縁に背面側から連続的になされる。背面は主として上方向からの加撃による3枚の剥離面から構成される。現存長 2.0 cm、最大幅 2.4 cm、最大厚 0.65 cm、重量 3.1 g。姫島産黒曜石製。

2 は縦長剥片で、下半部を欠損する。打面、打点の一定しない石核から剥離されたもので、背面の三枚の剥離面および背腹両面の剥離方向が異なる。現存長 1.3 cm、最大幅 1.55 cm、最大厚 0.85 cm、重量 1.2 g。姫島産黒曜石製。

1・2とも縄文時代にさかのぼる可能性がある。

(河村)

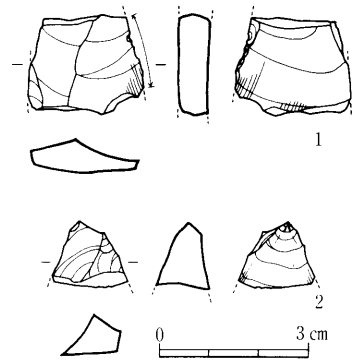


Fig. 36 出土遺物実測図



## 8 第二武道場排水溝新営に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 G・H-15・16

調査期間 平成元年10月9日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2m<sup>2</sup>

調査結果 工事は、東側を除いた第二武道場の周囲を建物から2.5mの間隔をあけて、雨水排水管およびそれに伴う集水桝の埋設を行うものである。調査は、配管部分に比べ掘削深度の深い集水桝設置地点10ヶ所のうち、5ヶ所を選定して行った。

北側東端部では、現地表下80cmまで本学統合移転時の埋め土で、西端部では、層厚115cmの埋め土の下位に旧耕作土が確認された。

西側中央部では、現地表下70cmまで本学統合移転時の埋め土であった。

南側西端部および中央部では、現地表下90cmまで本学統合移転時の埋め土で、その下位に少なくとも20cmの層厚をもつ旧耕作土が確認された。

いずれの調査地点でも、顕著な遺物は出土しなかった。

本学では、遺物包含層ないしは遺構消失の主要因は統合移転時の造成による削平で、旧耕作土が残存している場合、その下位に埋蔵文化財が埋存している可能性が高い。第二武道場周辺では、過去にほとんど調査はなされておらず、その立地、遺物包含層・遺構の分布状況については不明な点が多く、今後の調査によって明らかにしてゆく必要がある。



Fig. 37 調査区位置図

### 9 案内標識設置に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 I-14 (A地点), L-18 (B地点)

調査期間 平成2年1月4日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5 m<sup>2</sup>

調査結果 標識設置地点は4ヶ所計画されていたが、その内2ヶ所は過去の調査結果から、埋蔵文化財に直接影響がないため、調査対象から除外した。

A地点では、基礎部分2ヶ所について立会った。工事による掘削深度は、現地表面から63 cmであったが、調査範囲内は本学統合移転時の造成による埋め土が堆積しており、工事基底面では真砂土が検出された。埋め土中には、本学では弥生時代から古墳時代の遺物包含層に相当する黒褐色粘質土 (Hue7.5YR2/2) がブロック状に混入していたが、出土遺物はなかった。周辺地域では、本部2号館敷地<sup>1)</sup>、大学会館前庭<sup>2)</sup>で同一の色調、組成をもつ遺物包含層が検出されており、工事地域の東側から造成によって客土された可能性が高い。

B地点では、基礎部分1ヶ所について立会った。工事による掘削深度は、現地表面から53 cmであったが、堆積層はA地点と同様で、顕著な出土遺物は認められなかった。工事地点は構内循環道路面より約55 cm上位にあることから、造成による盛り土と判断される。

[注]

(河村)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1990年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。

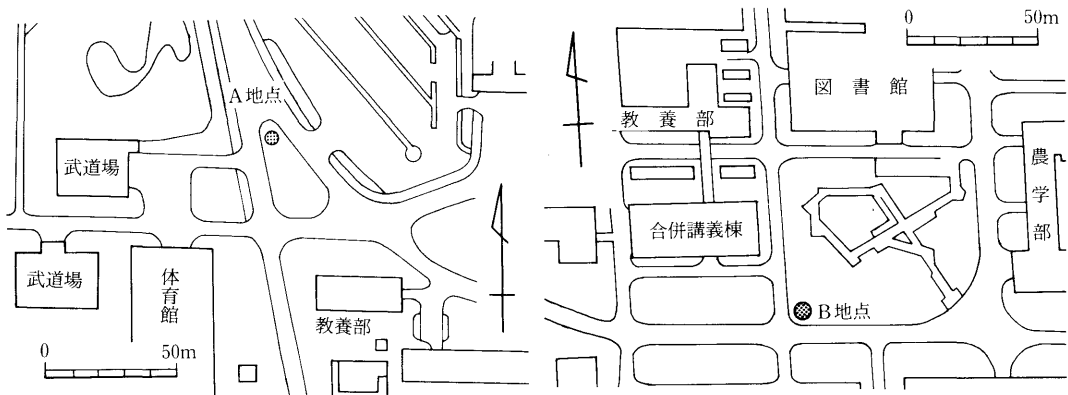


Fig. 38 調査区位置図

10 本部車庫給水管改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-13

調査期間 平成2年1月10日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6.5 m<sup>2</sup>

調査結果 工事は、現地表面から約65 cm掘削して配管を埋設するものである。隣接する東側の本部2号館敷地の調査では、丘陵が北東から南西に大きく下降しており、建物の南西端部では地山が地表面から2.1m下位で検出されている。遺物包含層は、この落ち込みに最大で層厚約80 cmにわたって堆積していた。工事地域は、本部2号館敷地、北側の駐車場に比べて約2.5~3m低くなっているが、地山の落ち込み状況から、工事によって遺物包含層が掘削される可能性があるため、立会調査を実施した。

土層の堆積状況は、工事基底面まで本学統合移転時の造成による埋め土で、工事による埋蔵文化財への直接の影響はなかった。なお、埋め土中には黒色の粘質土がブロック状に混入しており、内部から弥生土器片5点が出土した。同層は、本部2号館敷地の調査で検出された3枚の遺物包含層のいずれかに相当するものと思われ、造成時の削平による客土と考えられる。

また、埋め土には褐色の粘質土も散在しており、遺物包含層の搬入土と考えられたが、今回の調査では遺物は出土しなかった。

(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1990年)。

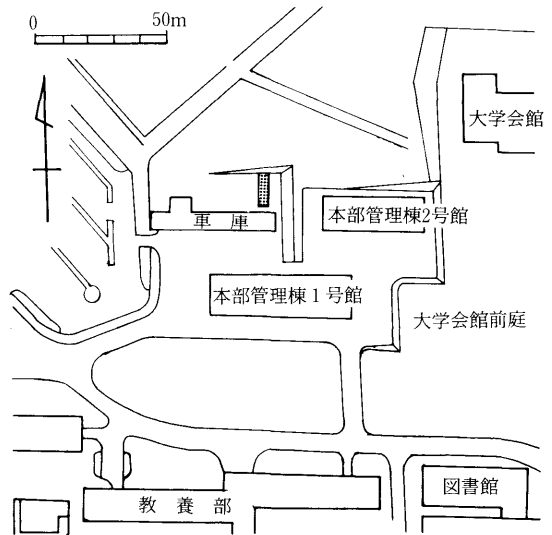


Fig. 39 調査区位置図

## 11 大学会館前庭環境整備に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・M・N-14・15

調査期間 平成2年3月7日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約35㎡

調査結果 大学会館前庭は上下二段に造成されている。工事は、前庭の上段部分の東縁部に石積擁壁を設置するとともに、下段東縁部に自転車置場を新設するものである。

後者に伴う掘削は現地表面から20cmで、先に実施した前庭部分の試掘調査の結果、埋蔵文化財に直接影響を与えないため、調査対象から除外した<sup>1)</sup>。

前者は、総延長距離約45mについて幅70~85cmの規模で、現地表面から最大95cmの掘削を行うものである。

調査地域の基本層序は、地点による層厚の差異はあるが、上位から本学統合移転時の造成による埋め土、旧水田耕作土、床土、橙褐色粘土の地山の順に堆積している。遺物包含層は確認できなかったが、北端部から約11m南の地点で東西方向に走行する溝を検出した。検出面は現地表面から45cm下位で、幅38cm、深さ16cmの規模をもち、断面形は「U」字形を呈する。遺物が出土しておらず、詳細な時期は明らかでないが、埋積土が灰褐色土であることから、当該地域で過去に検出されている遺構の埋積土の色調を勘案すると、中

世の溝の可能性が高い。

(河村)



[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。

Fig. 40 調査区位置図